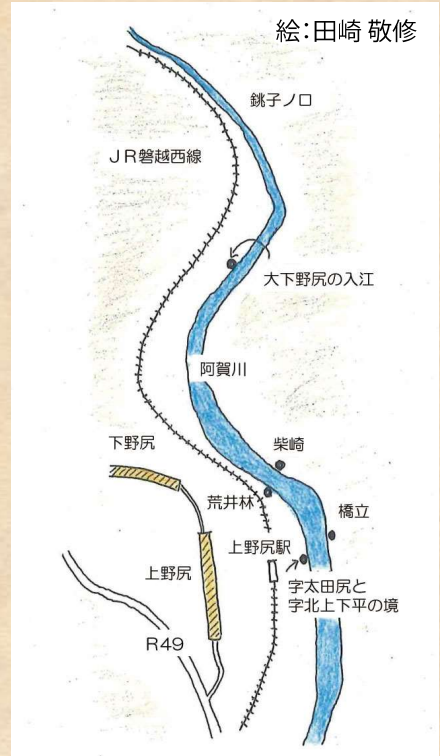


野尻の繁栄と船着き場の変遷

会津藩の廻米（遠隔地へ米を輸送すること、またはその米）は陸運と舟運で行っていました。陸運は白河街道など複数の陸路（途中から河川も）で江戸に、舟運は阿賀川と日本海などで大坂に輸送していました。経済の比重が大坂から江戸に移るにつれて舟運の廻米は減少し3万俵程度でした。舟運は、阿賀川が浅く川幅も狭いため小型の鳥飼船しか使えず、さらに利田の滝（現在の喜多方市高郷町）と銚子の口の2カ所は通船不可能で、荷を積み直し、次の船着き場まで陸送しなければならない難儀がありました。

積み直しの船着き場は何カ所もありましたが、他所は舟運のみであったのに対し、野尻は越後街道の陸運の駅所でもあったため大変な繁盛でした。江戸時代の初めは、下野尻の太下野尻（現在の端村自治区）近くの入江周辺に船着場があったと考えられています。時代が進むにつれて野尻の船着場は、「荒井林付近」「字太田尻と字北上下平との境付近（JR上野尻駅裏手の川岸）」と、次第に上流の上野尻の方に移っていきます。対岸の柴崎・橋立からは利田の滝を回避しそのまま陸送されてきた廻米や、山三郷の廻米の一部が野尻に舟で横渡し（柴崎→太下野尻、柴崎→荒井林（旅人はこのルート）、橋立→字太田尻と字北上下平の境）されていました。この横渡しも時代が進むと橋立が中心になります。船着き場の移動の理由は、大水による船着き場の損傷などが一般的に考えられていますが、船着き場の上流新設の願文には、「蔵や番所の修繕がなされてなく、荷揚げの道が抜け落ち」などという文言はありますが、「洪水で使えなくなった」という明確な文言は見当たりませんので他の理由もあったのではないのでしょうか。

その時代の野尻側の中心的な船着き場のことを「中島」と呼んでいましたが、他の船着き場が全く使われなくなった訳ではなくさまざまな状況（水量や利便さなど）により利用されていたようです。



今月の表紙

今月は、橋屋自治区のソバ畑です。沈む夕日に照らされたソバの花が、風に揺られて幻想的な風景を作り出していました。

編集後記

今月号で特集した「滝坂地すべり」の対策事業に出てくる排水トンネルや集水井の写真は、実は一昨年の4月に私が撮影したものなんです。当時は、広報紙担当になって間もない頃で、「何かに使う時があるかも…」と思い、他の課の現場視察に同行させていただけました。内部はひんやりと涼しくて、どこまでも長いトンネルが続いていたことを思い出します。今回の特集記事で2年越しに掲載することができて嬉しいです。

取材などで撮影した写真の中には、まだまだ眠っているものがたくさんあります。そんな秘蔵写真たちもこれから紹介していければ…。(秦)